

児童福祉における「家族」の成立に関する人類学的研究

—ルーマニアの里親制度を事例に—

筑波大学人文社会科学研究所国際公共政策専攻 博士後期課程2年（助成時）

同上 博士後期課程2年（現在）

浅田 直規

1. 要約

本研究はルーマニアの里親制度を中心に、児童福祉制度における受益者を人類学的に研究することを通じて、「家族」の成立における社会的側面について分析する。「子ども」は人類学においては、その成立当初から研究対象ではあるものの、あくまで大人の側から見た子ども像が提示されているに過ぎない。

また、広く社会科学においても、子どもは従属的な非-主体として描かれることが多く、子どもが大人から受ける影響についての研究は多くある一方で、子どもが大人に与える影響に関する研究は少ない。本研究は、児童福祉制度受益者の子どもと、彼/彼女たちを取り巻く人々について、民族誌的データを子どもの視点からも収集し、「社会的家族」関係が、子どもと大人の双方向的なやり取りの中で形成されていることを提示する。

加えて、ルーマニアの児童福祉制度は西側先進諸国からの開発支援を強く受けた分野である。開発においては、中長期的視点からの開発計画・事業の評価・分析が課題となっており、本研究は、開発計画終了後の社会についての再帰的な分析も同時に行う。

2. 研究の目的と背景

(1) 家族の形成に関する社会的側面の人類学的分析

本研究は、ルーマニアにおける、福祉制度受益者の子どもとその周囲の大人の民族誌的データを収集し、人類学的に分析することにより、生物学的親子関係がない状況下で子どもと大人がどのように親子関係を構築しているのか、言い換えれば、「社会的家族」を形成しているのかを捉えることを第一の目的としている。

本研究の特徴として、子どもの視点からの民族誌的データの収集と、子どもを分析の中心に据えることが挙げられる。子どもは、人類学のみならず、社会科学分野において研究対象とされてきたが、子どもは非-主体として捉えられ、受動的な存在として描かれることがほとんどであった。本研究では、参与観察という長期にわたる現地社会への没入を伴う調査手法を用いることで、子どもと大人が「家族」関係を作り上げていく中で、どのように子どもが主体的に活動し、大人たちに働きかけているのかを考察する。

(2) 国際支援・開発後の被援助国における制度受容と変遷の分析

第二に、本研究では、EU加盟から10年以上が経過したルーマニアの児童福祉制度を分析することにより、国際支援・開発の影響を中長期的な視点から捉えることを研究目的の一つとしている。

開発分野においては、支援計画のプロジェクト化の弊害が指摘されており、支援対象となった社会に対する短期的な影響評価は行われるものの、中長期的な視点からの評価はされづらい。本研究では、ルーマニアの児童福祉制度という、すでに支援が終わった分野に関して開発的な視点から改めて分析することにより、上述の課題に対する一つの知見を提示したい。

(3) 社会福祉における人類学的知見の応用可能性の模索

第三に、本研究では、調査の過程で現地NGOやソーシャルワーカーとの協働のもとデータ収集を行う。このデータ収集過程を経ることで、本研究は単に学術的知見を得るだけでなく、学術的知見の応用可能性を模索し、その形を提示することをも目的としている。

3. 研究の項目と内容

今回調査においては、上述の(1)が中心的な調査項目であり、調査方法と内容は以下の通りである。

●長期フィールドワーク

今回調査は、ルーマニア国ブラショブ県ブラショブ市での2020年8月2日～2021年2月10日の期間における長期フィールドワークを中心とした。主に、現地NGOの活動にボランティアとして参加し、ルーマニアにおける児童福祉の受益者(子ども、親)に対する参与観察を、英語および現地語(ルーマニア語)を使用して行った。また、複数の団体の活動に参加することで、社会的孤児たちが置かれる環境の多様性を把握するとともに、社会的孤児が再生産される過程を俯瞰的に捉えることも目的とした。

活動場所は、里親家庭内、孤児院、都市近隣村落であり、調査期間中は週に一回程度、各場所を訪れ、その場所での活動や自然な立ち振る舞い、会話内容を記録し、また、場合によってはインタビューも行った。

4. 研究の成果

本研究において、「社会的家族」関係は、子どもと大人の合意によって形成されるという結果を得た。特に、里親家庭においては、不意の変化により、子どもと大人の同居関係が崩れることがある。その後、大人の側から子どもに対して、「家族」関係の継続を求めても、子どもの側が拒否すれば、「家族」関係の回復が難しい事例が確認された。

人類学においては、家族研究において、「家族」が作り上げられていくダイナミズムに注目される中で、本研究を通じて、子どもの側からの動作が「家族」を作り上げる動力の一つであることが提示されうると考えられる。